International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

「ジンバブエドル」と「ボンドノート」
～ハイパーインフレ以降も続く経済危機～

IDCJは現在、北海道大学観光学高等研究センターと共同で、国際協力機構（JICA）による開発調査「ジンバブエ国貧困削減に資するコミュニティ・ベースド・ツーリズム計画プロジェクト」を実施しており、パイロットプロジェクトの支援を通じてジンバブエだけでなく、周辺の南部アフリカ諸国でも活用されるようなコミュニティ・ベースド・ツーリズムの実施のためのマニュアルを作成しています。

ところで、読者の皆さんは、「ジンバブエ」という国に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。2000年代に発生した歴史的なハイパーインフレーションを思い起こす人も少なくないのではないかと思いますが、その一方で、この国の「その後」について知っている人は決して多くないと思います。

ジンバブエのハイパーインフレーションは、政府が財政赤字を補填すべく自国通貨「ジンバブエドル」を大量発行したことから発生しましたが、その後、09年にはジンバブエドルを事実上放棄（15年に正式に廃止）し、代わって米ドルや南アフリカランド（以下、南アランド）、ユーロ、日本円、中国元など９カ国の通貨の国内流通を認めたことにより収束をみています。

２００８年に発行された１００兆（T）ジンバブエドル

ボンドコインと2ドルボンドノート。ボンドノートのデザインは１００兆ジンバブエドルとよく似ている

現在は、米ドル紙幣のほか、「ボンドコイン」と呼ばれるジンバブエ中央銀行発行の硬貨が実際に使用されています。私たちが前述のプロジェクトを開始した15年６月には、まだ南アランドのコインが使用されていましたが、南アランドの対ドルレートが下落するにつれて、15年秋ごろからはボンドコインが使われるようになり、今では完全にボンドコインに入れ替わっています。

その一方で、この国は、かつては農産物を輸出する農業国でしたが、2000年代はじめに実施された土地改革によって、農業の生産基盤が破壊されてしまいました。この影響は現在もなお続いており、ジンバブエの経済危機はまだ終わっていません。

例えば、農産物の輸出が減少したことで経常収支は大幅な赤字が続いており、外貨でありながら国内の流通通貨である米ドルが国外へ流出しています。そのため、ジンバブエは近年、輸入品の支払いに苦労しているだけでなく、失業を伴うデフレにも苦しんでいます。さらに、ジンバブエ政府自身は米ドル紙幣を発行できないため、他の国では使われそうにないような古びた米ドル紙幣が使われています。

このような状況を受け、ジンバブエ政府は16年５月から国内銀行口座の引き出し金額の制限を開始。しかし、それ以来、ジンバブエの人たちが現金の引き出しを求めて銀行の前に毎日、長い行列をつくるようになりました。そして同年11月に発行されたのが、「ボンドノート」と呼ばれる“補助紙幣”です。このボンドノートは、少額の補助通貨として流通している硬貨(ボンドコイン)の紙幣版と言えます。

しかし、新しく発行されたこのボンドノートは、デザインも手触りもジンバブエドルにそっくりであるため、現地ではジンバブエドルのハイパーインフレーションを思い出す人も多いことでしょう。今後、ジンバブエの人々の暮らしがどう変わり、ボンドノートがどのように活用されるかは予断を許さない状況ですが、終盤に差し掛かったこのプロジェクトの活動を通じて、引き続きこの国の社会や経済を見ていきたいと思います。

（文責：国際開発センター　経済社会開発部　主任研究員　榊原洋司）

〒108-0075 東京都港区港南1-6-41 品川クリスタルスクエア 12階　TEL. 03-6718-5932　FAX. 03-5781-0910
http://www.idcj.co.jp